高温対策

６月

水　稲

育苗期における高温・高日射条件では、もみ枯細菌病等の病害、苗の徒長やヤケ苗が発生しやすくなるため、高温・過湿にならないようハウスの換気を行うとともに、十分なかん水を行う。
　また、生育前半が高温であった場合は、過剰分げつや籾数過多が見られることから、適正な基肥の施用、栽植密度の調整、中干しの徹底等に努める。なお、肥効調節型肥料（いわゆる基肥一発肥料）を使用した場合でも、現場での生育・栄養診断の実施による適切な追肥に努める。

茶

１　急激な生育により摘み遅れることがないように、茶園巡回による生育状況の把握と計画的な摘採に努める。また、摘採後も葉傷みが進まないよう、摘採した生葉は可能な限り速やかに茶工場に運搬するとともに、茶園での摘採後及び工場への運搬中に直射日光に晒されないように注意する。工場到着後は速やかに生葉コンテナ等に移し、葉痛みが進まない様に留意する。
２　摘採終了茶園においては、周辺の茶園の摘採状況と病害虫の発生状況を把握し、適期防除に努める。

野　菜

１　かん水、地温上昇の防止
①かん水は、立地条件や品目、生育状態等を十分考慮し、早朝・夕方に実施する。施設内でのかん水は、湿度が高くなりやすくなることから、夜間や曇雨天の日中には、通風するなどして湿度を下げる。また、地温上昇の抑制や土壌水分の保持を図るため、使用時期や施肥等に留意し、地温抑制マルチや敷わら等を活用する。
②施設栽培は、妻面・側面を開放するとともに、作物の光要求性に応じて、遮光資材等を使用し、施設内の温度上昇を抑制する。遮光資材は、果実の日焼けや葉やけの防止にも有効である。循環扇は、局所的な高温・高湿空気の滞留を防ぎ、室内温度・湿度の均一化が図られるとともに、作業快適性の向上が期待できる。さらに、天窓の開閉や換気扇等を活用した換気、遮光資材、細霧冷房等の対策と併用することが重要である。

２　草勢維持等
　こまめな除草や側枝、弱小枝及び下葉を除去し、風通しを良くする。
　特に果菜類については、①不良果の摘果、若採りを行い、着果負担の軽減を図るとともに、適切な施肥により草勢維持に努める。②老化葉、黄色葉を中心に摘葉を実施し、水分の蒸発抑制に努める。
　土壌の乾燥が続くとトマト、ミニトマト、ピーマン等では、「心止まり」、「尻腐れ果」の発生が心配されるので、カルシウムを含む葉面散布剤を花房、新葉、生長点に十分の量がかかるように葉面散布する。

３　病害虫防除
　乾燥後のかん水により、肥効が高まり軟弱徒長の生育し、病気の発生が心配される。また、気温の上 昇と乾燥によりアブラムシ類、アザミウマ類、ダニ類、うどんこ病等の発生も予想されるので、防除に 努める。

果　樹・オリーブ

１　土壌乾燥の防止
　根群の多く分布しているところに敷わら、敷草等を実施し、土壌からの蒸散を少なくする。雑草が繁茂している場合は、刈取りを行う。なお、除草剤を使用する場合は、農薬使用基準に沿って処理することとし、接触型および吸収移行型を使用し、土壌処理型は使用しない。

２　樹勢の維持
　この時期は果実の細胞分裂が最も盛んで、肥大量も旺盛な時期である。できるだけ、頻繁なかん水を心掛け、樹体へのストレスを避けるよう努める。

３　かん水（節水利用）
　水の確保量を勘案して、水量が十分確保できない場合は、細根が多く分布している部分へ集中的に

かん水を実施するか、土壌表層に溝を掘り、その部分に潅水する。また、ドリップチューブを用いた点滴かん水法は特に節水効果が高い。

4　病害虫防除

高温乾燥はハダニ等が発生しやすい条件となるので、発見した場合は、早めの防除を心掛ける。

5　着色不良対策

収穫期を迎える果実については、着色不良を防止するため、せん定や反射シートの活用等による適切な光環境確保の取組により着色を促す。また、着色が遅延することに伴い収穫時期が遅れ、果実が過熟とならないよう、適期収穫に努める。

花　き

1　地温上昇の防止

稲わら、マルチ等を敷き、土壌からの蒸散を抑制するとともに、地温の上昇を防ぐ。

2　病害虫防除

ダニ類、アブラムシ類、スリップス類などの発生が多くなるので防除に努める。高温時の散布は薬害が生 じやすいので、朝夕の涼しい時に薬液濃度を薄めにして散布する。

3　かん水

かん水時刻は高温時を避けて、早朝あるいは夕方行うのを原則とする限られた水量を使用する場合、回数を減らしても一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。

4　遮光資材の利用

高温障害が予想される場合は、遮光資材（透過率 70%程度）を掛けて、気温の上昇を緩和する。特に定植から活着期にかけては、寒冷紗などで遮光し、活着促進を図る。

5　施肥

追肥は高温が解消されるまで中止し、もしどうしても必要な場合は、置き肥でなく薄めの液肥を与える。

6　電照

キクなど高温乾燥によって花芽分化を起こしやすいものは、電照開始時期を早めるとともに電照時間をやや長くし、電照量を多くする。

7　収穫

収穫作業はできるだけ朝・夕の気温の低い時間に採花し、常温での長時間放置はしない。

畜　産

1　家畜管理

観察の頻度を増やし、健康悪化の兆候を早く発見することによる健康状態の把握と適正な対応に努める。家畜の飲用水は清浄で冷たい水を給与するとともに、夏季の防暑対策はできるだけ早めに開始する。畜種により多少異なるが、畜舎内の平均気温（午前 10 時の気温が目安）が 24～27℃になると、泌乳量や産卵率等が低下してくるので、直接、家畜に影響が出る前に防暑対策を実施して、家畜の事故発生と生産性の低下を防止する。

1)畜舎環境の改善

①ファン送風の実施、通風の改善（畜体への送風、散水、散霧）。
②直射日光の遮光、日陰樹の利用、屋根裏、壁、床への断熱材の設置、屋根への消石灰の塗布。
③飼育密度の軽減等 。

2)飲用水および飼料の管理

①清浄で冷たい飲用水を十分な量給与。
②良質で消化率の良い飼料の給与やビタミン、ミネラルの適切な追給。
③飼料の早朝および夜間給与（比較的涼しい時間帯に実施）。
④飼料保管管理の徹底による変敗防止等（配合飼料タンクの風車式換気蓋の設置等）。

2　飼料作物

高温が続くことにより、例年より作業時期が早まる可能性があることから、生育状態を把握しながら適切な作業に努める。

熱中症対策

暑熱環境下で作業を行う場合は、熱中症対策として、高温下での長時間作業を避け、こまめな水分と塩分の補給や休憩を取るように心掛ける。特に、高齢者は、のどの渇きや暑さを感じにくく、気がつかないうちに熱中症になる可能性があるため単独での作業を避け、定期的に異常がないか巡回を行うなど、効果的な対策を行う。

熱中症対策の暑熱環境下での農作業上の注意点を参照する。